



書道研究誌

書 の 光

2
2023

Vol.654
宮城野書道会



漢詩を味わう

第163回

けいしゅうのげんたいふをおくる
送桂州嚴大夫

かんゆ
韓愈

蒼蒼森八桂 蒼蒼たり森たる八桂

茲地在湘南 茲の地湘南に在り

江作青羅帶 江は青羅の帯を作し

山如碧玉簪 山は碧玉の簪の如し

戶多輪翠羽 戸は多く翠羽を輪び

家自種黃甘 家は自ずから黃甘を種ゆ

遠勝登仙去 遠勝登仙して去れば

飛鸞不暇驂 飛鸞驂するに暇あらず

桂（金木犀）の木が、伝説上の月の宮殿のように生い茂り、
こんな美しい所が湘江の南に在る。

川は青い羅の帯となり

山は碧玉で作った簪のように美しい。

家々の戸ごとに孔雀の翠の羽が運び出され、

どの家でも黄色いミカンの木が植えられている。

このはらかな桂林の仙境に遊べば、

靈鳥である鳳凰が君を休むことなく案内してくれるのだ。

《森》 樹木が多いさま。ここでは金木犀の木が茂っているさま。

《八桂》 八株の金木犀の木があるという伝説の月の宮殿。

《青羅》 青い薄地の絹の織物

《鸞》 中国の想像上の鳥で靈鳥とされる鳳凰を言う。

この詩は中唐の詩人韓愈が、八二二年に桂管觀察使として桂林に赴任する友人の嚴諫に贈った送別の詩です。

桂林は漓江を挟んで奇峯が連なる中国南方屈指の景勝地です。当地に群生する「玉桂（＝肉桂、クスノキ科の常緑樹）」が群生することから命名されたと言われていますが、秋になると桂花樹（金木犀・銀桂・丹桂）などが一斉に咲き匂うことから桂林と名付けられたとも言われています。長く未開の地で、魏晋南北朝の時代に開發が進みましたが、唐時代においてもなお「瘴癘の地（マラリアなど南方特有の風土病を起こす毒熱の気がある地）」として恐ろしい場所だと思われていて、一度ここに流されればもう二度と生きては帰れないと信じられてきました。そんなそれまでの桂林のイメージを一変させたのがこの韓愈の詩です。

「江は青羅の帯を作し 山は碧玉の簪の如し」とその景色を形容して、読む者を桃源郷へと誘います。そして仙境ともいえる桂林に遊べば、鳳凰が君を迎え入れてくれるから、何も心配はいらないよ。と友の不安な気持ちを慮っています。

この詩の作者、韓愈は七九二年に二十五歳で進士に及第しています。諸官を歴任し監察御史（官吏の取り締まり監督）から国子祭酒（国立大学学長）の高官にまでなりましたが、剛直な性格が災いし、生涯で二度左遷され遠方に流謫されています。最大の挫折は五十二歳のときです。韓愈は中国伝統思想の儒教の信奉者でしたが、皇帝憲宗が、ある寺院の仏舍利を長安の宮中に迎え入れようとした。これに対し韓愈は「仏骨を論ずる表」を提出してこれを諫めました。その文章のなかに、仏教に帰依する帝王はみな短命で国を滅ぼす、といった内容があり、その激烈さから憲宗の怒りに触れ、広東省潮州の勅使に左遷を命じられています。この詩を詠む三年前のことです。

韓愈が流される途中に詠んだ詩のなかに「吾が骨を瘴江の辺に収めよ」という一節があり、左遷された潮州も「瘴癘の地」としていますが、幸い一年で国子祭酒として長安に召還されています。韓愈が桂林に行ったという記録は残されておらず、自分の辺地への流謫経験と、見聞きした桂林のことを土台にして、同じ華南のイメージを払拭して友人の嚴諫を励ますための送別詩のようです。

参考文献・中国詩人選集「韓愈」（岩波書店）・漢詩大系（大修館書店）

牆角 数枝の梅 寒を凌ぎて 独自に開く 遙かに知る 是れ雪ならざるを 暗香の来たれる有るが為に

牆角数枝梅凌寒自開遥
知不足雪有暗香来

《大意》垣根のかどの数本の梅の枝が、寒さをものともせずに、ひとり花を咲かせている。遠くからでも、それが雪ではないとわかる。どこからともなくほのかな香りが漂って来るからだ。(王安石詩・梅花) ※牆は牆と同字

梅發き雪樹に盈ち 松多く風琴に在り

梅發雪盈樹 梅發雪盈樹
松多風在琴 松多風在琴

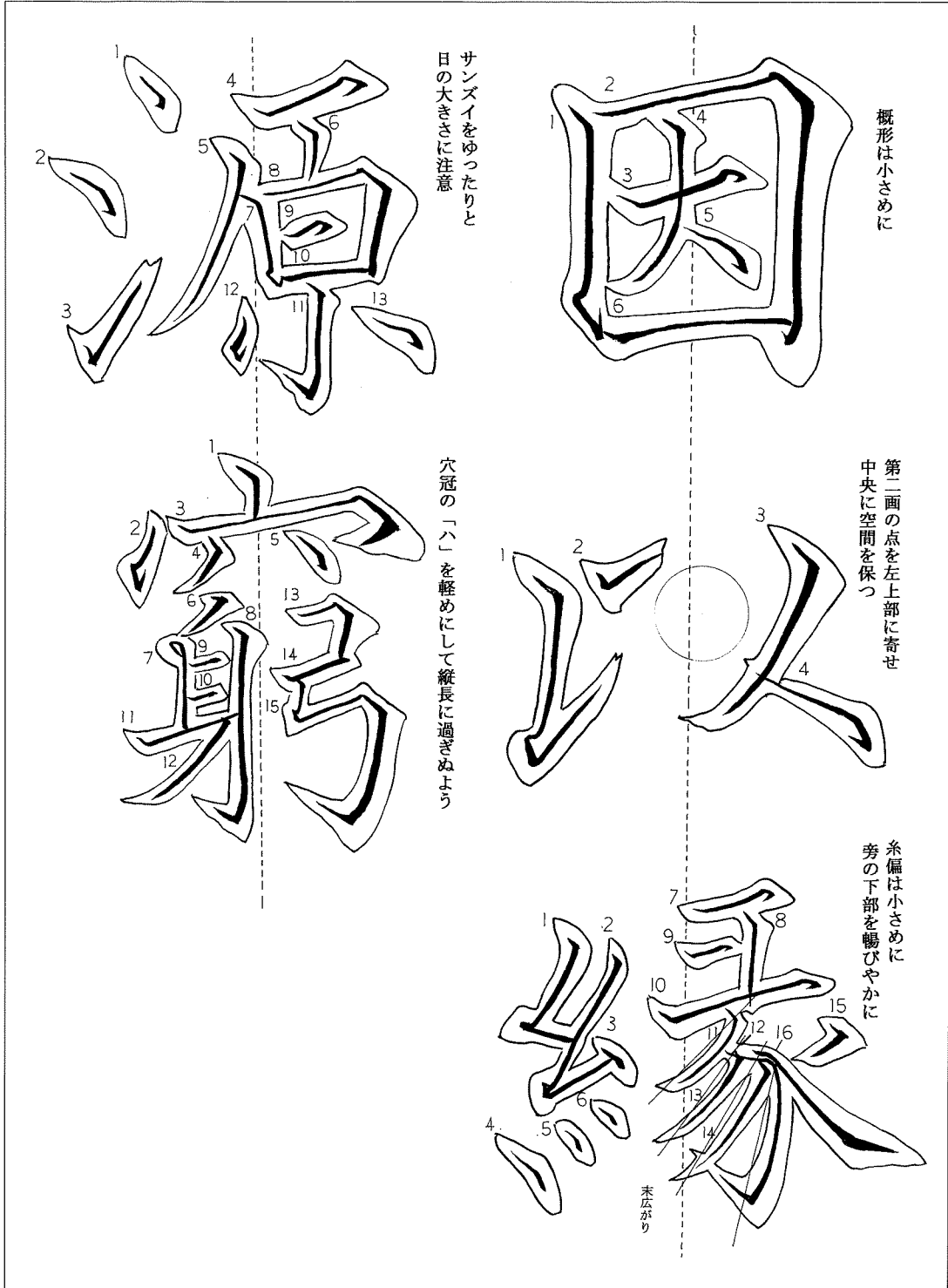
《大意》梅が雪を積んだ樹木に發き、松の多くは風に吹かれて琴を奏でているようだ。(徐廷訣)

読み

因りて以て源を縁ねて窮む（おかげで仙境の水源を尋ねてそれをきわめた。）

源 因
窮 以
縁

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について
 ・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(前半)

落日山水好

落日 山水好し

漾舟信歸風

舟を漾わして 歸風に信す

玩奇不覺遠

奇を玩んで遠きを覺えず

因以緣源窮

因りて以て源を緣ねて窮む

遙愛雲木秀

遙かに雲木の秀でたるを愛し

初疑路不同

初めは路の同じからざるかと疑う

安知清流轉

安んぞ知らん 清流轉じて

偶與前山通

偶々前山と通ずるを

捨舟理輕策

舟を捨てて輕策を理む

果然愜所適

果然として適する所に愜う

老僧四五人

老僧 四五人

逍遙蔭松柏

逍遙して松柏に蔭う

(後半に続く)

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

源 窮
因 以 縁

源 窮
因 以 縁

次号課題

隸書

木 秀
遥 愛 雲

源 窮
因 以 縁

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

遥かに雲木の秀でたるを愛し

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

細字部昇格試験課題実施要項

- ・左記の三体千字文の一節を所定用紙に揮毫
- ・欄外に支部・段級・氏名を明記して下さい
- ・〆切三月二日(木)・受験料三、三〇〇円(税込)

音

シヨウギョセキボウ
ジキンイボウ

略解

妾は機織りに努め
侍女は部屋をそうじする

妾御績紡侍巾帷房
妾御績紡侍巾帷房
妾御績紡侍巾帷房

佐藤象雲書

支部	順位	氏名

時ものを解決すゝや

春を待つ

高浜虚子

和泉溪石 先生書

高嶺

高嶺

象雲臨

■ 褚遂良ちよすいりょう・雁塔聖教序がんとうしよきょうのじよ (初唐・西暦六五三年) の臨書 (70)



「高嶺」

今月は二文字の臨書です。褚遂良の楷書は行書的な情感豊かな線が最大の特徴です。軽妙な細線が主体ですが、単純な線ではなく表情が多彩です。今回は文字数が少ないので、特に線の把握に重点を置いて習ってみましょう。まずは起筆の角度や強弱に注意します。

【高】 上部横画はしなやかな細線で、収筆を軽く下方に下げています。続くハシゴの二縦画は背勢で上部の横画が細いためになおのこと強く見えます。そして最大の特徴は下部「回」の線の変化です。左縦画は線というよりは点です。続く強い起筆から始まる横画から縦への右側の転折では、一旦力を抜いて細線のまま方向転換して、収筆で筆圧を高めて押し出すように撥ねています。この手法は褚遂良独特のもので、「而」など他の字でも見受けられます。全体的に左右対称ではなく右半が広くなります。

「嶺」

【嶺】 三つの部分のそれぞれの位置取りが絶妙です。「山」を傾ける書き方は、初唐の楷書に多く見受けられますが、至極自然で、下部との違和感がありません。続く「令」は字勢が左下へ向かっていますので、これを補うように、「頁」は右上に位置させて、全体のバランスを保っています。例によって、線同士のぶつかり合いがないために、画数が多いながら明るい結体です。

廻互殊大體

廻互殊なりと雖も大体(相い渉る)



■孫過庭・書譜(初唐・西曆六八七年)の臨書

象雲臨

『廻互殊大體』

- 今回も孫過庭がこの部分で述べている内容に触れたいと思います。「草書は筆の動きが少し違っただけでも文字にならず、これに対して楷書は点画が少し欠けても、文字として読むことができる。」として、楷書と草書とは点画と筆の動きが対照的なことを孫過庭は言います。それでも「廻互殊なり」と雖も大体相い渉る(両者に違いはあっても緊密な関係にある)と結んでいます。
- 〔廻〕 しんにゆうの終わりの大胆な跳ね出しは隸書の波磔のようです。
 - 〔互〕 線の繋がりが非常に巧みな筆遣いです。連続性を損なわずに線が変化しています。
 - 〔雖〕 偏から旁に続く斜線を太くし、旁の下部は小さく収めます。
 - 〔殊〕 偏旁を扇方に広げて支え合う形です。
 - 〔大・體〕 二字とも筆先を利かせて細線でリズムカルに運んでいます。